

# 多施設で行った遠隔授業での多職種連携医療教育の実践報告

川上ちひろ<sup>1)</sup>・田島嘉人<sup>2)</sup>・中嶋さつき<sup>3)</sup>・栗田尚佳<sup>4)</sup>・寺町ひとみ<sup>5)</sup>

<sup>1)</sup> 岐阜大学 医学教育開発研究センター (〒501-1194 岐阜市柳戸 1-1)

<sup>2)</sup> 平成医療短期大学 リハビリテーション学科 理学療法専攻 (〒501-1131 岐阜市黒野 180)

<sup>3)</sup> 朝日大学歯科衛生士専門学校 (〒501-0223 瑞穂市穂積 1851-1)

<sup>4)</sup> 岐阜薬科大学 薬物治療学研究室 (〒502-1196 岐阜市大学西 1-25-4)

<sup>5)</sup> 岐阜薬科大学 病院薬学研究室 (〒502-1196 岐阜市大学西 1-25-4)

## 1. はじめに

わが国は 65 歳以上の人口が全人口に対して 21%を越える超高齢社会に 2007 年に突入し、2020 年にはその割合が 29.1%になると推定されている<sup>1)</sup>。超高齢社会になることで、医療的ケアや生活支援が必要な高齢者が増加するため、地域包括ケアシステムの構築が重要となる<sup>2)</sup>。地域包括ケアシステムとは、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的で、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供をするシステムであり、2025 年を目途にその構築が推進されている<sup>3)</sup>。

医療機関に入院している患者の多くは退院後地域（家庭）に戻り、高齢者の場合引き続き医療的ケアや生活支援が必要になることも多い。現在医療系大学で学ぶ多くの学生は卒業後医療機関などの場で働くことになるだろうが、そのためこのような高齢者の医療や生活を考える機会が学生時代にあることが必要で、それを複数の医療専門職を目指す学生らとまなぶ多職種医療連携教育は貴重な機会である。

われわれは 2012 年から試行的に多施設協働の多職種連携医療教育を始め<sup>4)</sup>、2014 年から正式カリキュラムとして実施している。2020 年度も同様に実施予定であったが、2019 年末からの世界的な COVID-19 の流行のため、学生が一堂に会した対面による授業の実施が困難となった。そのためこれまで行っていた授業を、Web 会議システムを用いた遠隔授業に組み替えて実施した。ここでは、その実践までの経過と授業の実践報告を行う。

## 2. 2019 年度までの授業の概要

試行的実践を経て、2014 年から毎年 11 月上旬に、岐阜県内の複数の医療系大学が 1 つの大学に集まり、2016 年度からは平成医療短期大学を会場にして授業を実施していた。2018 年度までは、全学生を半分に分け、授業時間は 3 時間で午前もしくは午後のどちらかに参加するように調整していた。学生同士のグループディスカッションの時間を十分確保できるように、2019 年度には会場を増やし 3 時間から約 5 時間の授業へと規模を広げて実施していた。

授業は専門領域を混合した 7 名程度のグループを複数作り、グループでのディスカッションをもとに議論が進められるよう、学生同士で話し合える形式をとった。

教材としては架空の入院患者（脳梗塞で緊急入院となった 70 歳男性、糖尿病等の基礎疾患がある）が自宅で突然倒れ緊急入院となり、さまざまな医療者の支援を受けながら入院生活を送ったのち、在宅療養へ移行するというストーリーのシナリオを用いた。このシナリオをもとにオリジナルの映像教材も制作した。

この教材を軸にし、①入院患者の情報共有や退院に向けて専門職としての見立てを出し合う（グループディスカッション）、②退院や家庭での療養生活に向けて必要な準備を多職種の視点から検討する（グループディスカッション）、③②で話し合ったことを患者や家族に伝える（模擬カンファレンスのロールプレイ、医療者役／患者・家族役を学生が交代で演じる）という流れで実施した。学生は、初めて出会う多（他）領域のから様々な刺激を受け、今後の専門領域の学習や実習をがんばりたい、などの感想が述べられていた<sup>5) 6)</sup>。

### 3. 2020 年度の授業実施までの経過

2020 年度が始まったころ、COVID-19 の流行の状況によってこの秋の授業実施に影響があるだろうと予測し、遠隔授業と変更する心づもりで早々に動き始めることとした。

授業当日にむけて、各施設から代表者を 1 名決め、ワーキングメンバーとすることとした。当日までの準備の状況を、経時的にまとめた（表 1）。

なお、この授業は東海国立大学機構岐阜大学倫理審査にて承認を受けている（研究課題番号 29-242）。

【表 1】実施までの経過、準備スケジュール

授業日から 起算して	会議等	担当者	準備の具体的内容
およそ 4 ヶ 月前	ワーキング 会議①	ワーキング メンバー	大まかな授業の流れ、今後のスケジュールなど、全体の取りまとめ（担当校）を朝日大学歯科衛生士専門学校で行うことを確認した
およそ 2 ヶ 月前	ワーキング 会議②	ワーキング メンバー	2020 年度版の進行手順を完成させた、当日までの準備スケジュールや役割分担を決めた、Zoom は岐阜大学、岐阜薬科大学、平成医療短期大学で契約しているものを用いることとした
	授業に関する業務	各校から担当校へ連絡	授業での司会者の教員（岐大、薬学、平成）、PC 操作や Zoom 担当者、授業中のファシリテーターの教員をそれぞれの大学で決め、期日までに担当校に連絡することとした
1 ヶ月前	ワーキング 会議③	ワーキング メンバー	進捗状況の確認
	授業に関する業務	各校から担当校へ連絡	各大学で学生のインターネット環境の確認（自宅などで授業が受けられる環境か）、参加学生の最終名簿、取材やメディアに映りたくない学生の確認をし、担当校に連絡することとした
3 週間前	ワーキング 会議④	ワーキング メンバー	進捗状況の確認
	授業に関する業務	各校から担当校へ連絡	授業で用いるワークシート完成、Zoom のホストとなる 3 校は ID 等の情報を共有した
2 週間前	授業に関する業務	担当校から各校へ連絡	グループ分けした学生名簿を完成させ送付した
1 週間前	授業に関する業務	授業に関わる教員	学生へ授業用資料の事前配布を完了させた
	全体打合せ	授業に関わる全教職員	当日の進行や諸注意について、質疑応答を交えて全員参加で実施（都合が合わず参加できなかった場合は各自で録画で確認）
当日	授業当日	授業に関わる全教職員	授業の実施

### 4. 2020 年度の授業実践

授業当日について、以下に詳細をまとめる。

#### 4-1. 授業日時

2020 年 11 月 9 日（月曜）

午前の部 9：00～12：00 午後の部 13：00～16：00

## 4-2. 使用した Web 会議システムおよび運営方法

この遠隔授業（事前打ち合わせおよび当日授業）のプラットフォームとして用いる Web 会議システムは、Zoom ミーティングとした。

岐阜大学、岐阜薬科大学、平成医療短期大学でそれぞれの大学で契約している Zoom ミーティングを立ち上げ、全学生をこの 3 か所にグループ分けし、各自でアクセスしてもらった。各大学の教職員で司会やパソコン（Zoom）操作などを担当し運営してもらった。各校から全体管理 1 名、Zoom1 回線で 1 名の司会者、グループ分け（ブレイクアウト）した際のグループ数と同数のファシリテーター、パソコン（Zoom）操作、サポートの役割を決めた。教員数によっては、役割が重複していた大学もあった。

なお全体管理者の連絡用に別の Zoom を 1 回線つなぎ、授業中は常時情報共有した。

## 4-3. 参加校

参加校は、5 校、8 領域にのぼり、学生の授業対象者数は全体で 539 名であった。

①岐阜大学（医学部医学科 4 年生）、②岐阜薬科大学（薬学部 4 年生、科目等履修生）、③朝日大学歯科衛生士専門学校（3 年生）、④岐阜市立女子短期大学（食物栄養学科 2 年生）、⑤平成医療短期大学（看護学科、リハビリテーション学科：理学療法専攻・作業療法専攻・視機能療法専攻 2 年生）、が参加した。

また、教職員の教職者数もまとめた（表 2）。

【表 2】学生の授業対象者数および教職員の協力者数

大学	領域	学生対象人数			当日協力教職員数				
		AM	PM	合計	全体管理	司会 (AM・PM)	ファシリテーター	PC 操作 (AM・PM)	補助
①	医学	54	54	108	1	1・1	9	1	2
②	薬学	50	68	118	1	1・1	5	1・1	0
③	歯科	35	37	72	1	0	2	0	1
④	栄養	47	—	47	1	0	0	0	0
⑤	看護	31	31	62	1	1・1	14	2・2	9
	理学	35	35	70			7	1	
	作業	15	16	31			4	1	
	視能	14	17	31			5	1	
合計		281	258	539	5	6	46	10	11

学生は午前 35 グループ、午後 24 グループに分け、3 か所の Zoom にそれぞれ割り振った。また、欠席した学生は、医学 3 名、看護 3 名、理学 1 名であった。

ファシリテーターの教員は、他の役割と兼ねて作業した者もいた。

## 4-4. スケジュール

授業当日のスケジュールを示す。司会者およびファシリテーターは、このスケジュールを参考に授業を進めた。

基本的にはこれまで対面授業で行ってきた流れを残したが、全く同じように実施することは難しいと考えられたため、遠隔授業で実施できるような進め方についてワーキングメンバーで検討した（表 3）。

【表 3】授業のスケジュール

時間	授業内容	学生	司会	ファシリテーター	PC 操作
8:45～9:00/ 12:45～13:00 (15分)	午前 8:45、午後 12:45 から接続が可能な状態にしておく 各領域の資料と、ワークシートは学生に事前に配布しておく (紙もしくはデータ)	全体			出席状況の連絡を 5 校間の Zoom で行う
9:00～9:15/ 13:00～13:15 (15分)	動作確認、名前の表示方法など	全体	順次開始、 全体にアナウンス 自己紹介		Zoom に入れない学生への対応 出席確認 ブレイクアウト 振り分け作業
9:15～9:30/ 13:15～13:30 (15分)	オリエンテーション、市長挨拶(動画)、スケジュール説明、担当教員自己紹介	全体	グループワーク①の時間を含めた流れを説明する	自己紹介	ブレイクアウト 振り分け作業
9:30～9:50/ 13:30～13:50 (20分)	コアタイム① 映像教材視聴(場面: 緊急事態発生、虎郎の入院 3 日後、虎郎の入院多職種とのかかわり、虎郎の入院 1 か月後) 各自でワークシート記入 グループワーク課題の指示	全体	・グループワーク②の説明 ・ロールプレイの時は看護が司会		映像教材流す 14 分 55 秒で止める
9:50～10:30/ 13:50～14:30 (40分)	グループワーク①患者の把握 自己紹介、アイスブレイク(グランドスラム)(10分) ワークシート 4 の話し合い(5分) 職種の情報の聴取(5分) 職種からの発表と理解(20分)	グループ (ブレイクアウト)		・アイスブレイク(滞たらサポート) ・時間管理	ブレイクアウト ON  ブレイクアウト OFF
(15分)	休憩				
10:45～11:00/ 14:45～15:00 (15分)	コアタイム② 映像教材視聴(場面: 虎郎の退院に向けて多職種カンファレンス・グループカンファレンス) ワークシートに追記、職種別資料を参考に グループワーク課題の指示	全体	・グループワーク②の説明 ・ロールプレイの時は看護が司会		映像教材流す 22 分 18 秒で止める
11:00～11:45/ 15:00～15:45 (45分)	グループワーク②模擬カンファレンスにむけて 退院に向けて患者・家族にとって必要なケア・調整準備は何か意見をまとめる(画面共有)(20分) チューター教員に対し、ロール	グループ (ブレイクアウト)		・司会役がいなければ促す ・ファシリテーターが患者役でロー	ブレイクアウト ON  ブレイクアウト OFF

	プレイ（模擬カンファレンス） してみよう（20分） ふりかえりの感想（5分）			ルプレイ ・ロール プレイ中 は質問を してもよい	
11:45～12:00／ 15:45～16:00 （15分）	映像教材視聴（場面：虎郎の退 院に向けて退院前カンファレ ンス） メインパーソナリティーまと め（時間があればファシリテ ーターから感想）	全体	全体でまと め	感想など 述べる	映像教材流す

#### 4-5. 教職員による授業のふりかえりおよび次回への改善点

当日の授業に協力した教職員 66 名に、事後アンケートを Google Form®にて回答してもらえよう依頼した。締め切り期日までに、合計 38 名から回答があった（回答率約 58%）。

回答者の当日の授業の役割による内訳は、司会 3、ファシリテーター 26、PC 操作 7、サポート 2 であった。また所属領域による内訳は、医学 5、薬学 5、歯科衛生 2、栄養 1、看護 15、理学 5、作業 3、視機能 2 であった。

教職員からのアンケートを分類したところ、「授業の内容に関すること」（表 4-1）と「授業の運営に関すること」（表 4-2）に分けられた。

まとめられた内容ごとに、次回に向けての改善点の案も追記した。

【表 4-1】教職員のふりかえり 授業の内容に関すること

授業を行ってみて	次回への改善点
アイスブレイク	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイスブレイクが盛り上がらなかった。</li> <li>・お互いの専門職が何をしているか、基本的理解をアイスブレイクのときにできるとよい。</li> <li>・基本的な理解のないまま症例に入っても理解が追いつかず、議論が深まらない気がした。</li> <li>・ガイダンスを始める前に、グループ毎に（ファシリなしで）自由時間をとるとアイスブレイクがわりになるかもしれない。</li> </ul>	自己紹介と職種の紹介をアイスブレイクでおこなったらどうか。グループディスカッションを行う前に互いの専門分野を理解しておくことは、グループワークに入りやすくなる。
教材について	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・動画の情報（血圧、検査値、家族関係など）が手元資料であるとよい。</li> <li>・領域毎に配布された資料に DVD で示された以上の情報が記載されており、どう扱うのか戸惑っていた。</li> <li>・配布資料と DVD 情報とで、食い違っているものがあった。</li> </ul>	教材の扱い方について検討する。対面授業では途中で同じ領域の学生が集まり、領域別の資料を配布していた（ジグソー法）が、今回は事前に配布したため扱い方に困ったと考えられる。
グループワーク①	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・各職種の情報提示からチームで課題を共有するまで行き着けなかったため、もう 1 ステップ取り組みがあるとよい</li> </ul>	領域の資料をまとめて、全員に配布するなど他の領域の学びもできるようにするのはどうか（事前もしくは事後）。

<p>のかと思った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワーク①の内容が多く、何をどのようにしたらよいか質問があった。</li> <li>・職種間の意見交換(方針の違いがあるかどうか)までは時間的に難しかった。</li> <li>・職種別情報の共有が難しい。</li> <li>・グループワークで各職種からの情報を述べることは順に行えていた。</li> <li>・ワークシートの共有について事前の打ち合わせが曖昧だった。</li> <li>・対面授業では領域ごとの情報を見せ合える(視き見る)ことができた。</li> </ul>	
グループワーク②ロールプレイに向けて話し合い	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要なケアについて意見をまとめるのは難しそうに感じた。</li> <li>・ロールプレイまでの意見をまとめる時間が少ないと感じた。</li> <li>・画面共有して一人の学生に入力(タイピング)してもらったが、非常に遅かったので少し時間がタイトになってしまった。</li> </ul>	<p>提示された課題について検討することが、作業的にも時間的にも難しかったようだったので、課題内容を検討する。</p>
グループワーク②ロールプレイ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間どおりにブレイクアウトを解除されたため、途中でロールプレイが終わったグループがあったのではないかな。</li> <li>・ロールプレイまで実施せず、退院カンファレンス前までの意見交換の時間にしてはどうかなと思った。</li> <li>・振り返りの時間が取れなかった。</li> <li>・認知症もある対象者への指導が、患者本人への説明だけだと難しかった。</li> <li>・家族への指導の方が話やすかった様子だった。</li> <li>・学生にとっては患者・家族側の視点がないので、ロールプレイは彼らの気づきになると思う。</li> <li>・患者役の教員が質問すると、学生は教員が質問している感覚で答えるため、軌道修正が難しかった。</li> <li>・初めてのファシリテーターは他がフォローするので問題なかったが、今回は個別のグループに分かれているので知るべきがないと思った。</li> </ul>	<p>遠隔授業でのロールプレイの方法の検討が必要である。患者の視点に立つ機会があると学びが深まるので、患者の立場に立てるような方法を検討する。もしくは課題の内容について再検討する。</p>

【表 4-2】教職員のふりかえり 授業の運営に関すること

授業を行ってみて	次回への改善点
ファシリテーション	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・全般的にファシリテーターの介入が多くなった。</li> <li>・グループによってファシリテーターが介入するタイミングや程度が難しい。</li> <li>・グループワークがうまく盛り上がらなかった。</li> <li>・教員側でタイムキーパーをしなければならず、話の途中</li> </ul>	<p>ファシリテーションの方法について具体的の方針を決め、事前に伝えることが必要である。発言の少ない学生への促し、タイムキーパー、画面共有、介入の程度等を決め、目的から大きく外れないように進行できるよう共通理解しておく。</p>



<p>で内容がまとまるように仕切らなければならなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・午後の司会であったため、午前の問題点にある程度、対応することができた。</li> <li>・ファシリテーターが落としどころを作るのがポイントだと思う(例えば「リスク」「介護負担」など)。</li> </ul>	
学生への対応	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・率先して仕切ってくれる学生がいないと、無言が続き打ち解けるのが難しい。</li> <li>・タイムスケジュールを学生が理解できていなかった。</li> <li>・学生にとって馴染みがないことをうまく聞き出せていなかったように思う。</li> <li>・手元の資料を読むだけの学生もいたので、グループワークになっていなかった。</li> <li>・ディスカッション形式になりにくく、順番に発言するスタイルになってしまった。</li> </ul>	<p>討論なのか発表なのか形式を決めて、進め方を提示する。授業内容および学生のグループ内での役割や関わり方について、事前もしくは授業開始時に説明が必要である。事前に各校で事前学習を行うか、もし当日の説明のみで進められるようにするのか要検討である。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・バランス良く専門職をグループに配置したいが欠席があり残念だった。2名づつ学生が入っているところはよいと感じた。</li> </ul>	<p>参加学生数や協力教員数によって、バランスのよいグループ人数を決める。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容など把握していない学生さんがいた。</li> <li>・目的を共有する作業が必要と感じた。</li> </ul>	<p>授業の流れや内容を、配布された資料で事前に確認できるようにする。</p>
時間スケジュール	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・詳細なタイムスケジュールが分かり難いと感じた。</li> <li>・時間がタイトかと思ったが、ダレなくていいと思った。</li> <li>・お昼の休憩をもう少し長くしてもらいたい(午前・午後引き続きは休みがないと大変)。</li> <li>・意見をまとめたり、ディスカッションをもう少し取れるとよい。</li> <li>・全員が発言し終わっていないのにセッションが終わってしまった。</li> </ul>	<p>余裕を持った時間配分にする。お昼休みを確保する(午後の準備)。タイムスケジュールの提示方法について、チャットやアナウンス機能などを利用し知らせる工夫をする。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・午前は時間が足りなくなり、午後は時間が余る、ということがあった。</li> </ul>	<p>午前は準備などのこともあるので、スケジュールに余裕を持たせる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワーク中のタイムスケジュールがわかりにくい。</li> <li>・司会がタイムスケジュールを提示しながら説明してもらえたので、学生も理解しやすかったのではないかと思った。</li> <li>・ファシリテーター向けに、そろそろ「●●して下さい」の表示は助かった。</li> </ul>	<p>タイムスケジュールを細かく設定する、もしくはファシリテーターに運営を任せられるようにする。Zoomのアナウンス機能で全体へのスケジュールを知らせる。</p>
オンラインならではの工夫	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインとオンサイトを同じ内容で進めていくのは、不可能ではないだろうが難しいと思った。</li> <li>・オンラインで動画視聴できる体制やそれぞれの職種の要点が分かると、ファシリテートの向上ができるかもしれない。</li> </ul>	<p>今回の経験をもとにより効果的な遠隔授業を検討する。教員・学生ともに、遠隔授業ならではの事前学習(反転授業など)について検討する。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・画面上での顔や背景の映り方、声の大きさを確認したほうがよかった。</li> <li>・参加者の画像のはっきり見え、話していることもよく聞き取れるのがよかった。</li> <li>・1人1人の発言はきちんと聞けて、オンラインならではの緊張感もあった。</li> </ul>	<p>画面での表示(顔・名前・音声等)の方法等事前に確認しておく。</p>

PC 操作など授業を支える業務	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初の Zoom 入室時に、学生確認に時間がかかった(名前変更をしていないなど)。</li> <li>・間違えて入室する学生への対処が大変(別の大学、午前午後)だった。</li> <li>・ブレイクアウトの振り分けに時間がかかった。</li> </ul>	時間に余裕を持たせてスケジュールを組む(特に午前)。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スケジュール変更などの連絡が困った。</li> <li>・全体が把握できない、ちょっとした連絡ができない。</li> <li>・ブレイクアウト後、PC 操作や全体管理に連絡したいができなかった。</li> <li>・ファシリテータと管理との連絡方法を決めておくとよかった</li> </ul>	(Zoom に入れない)学生と教員が連絡が取れるようにしておく。各校で教員間の連絡方法を検討する。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・PC 操作など裏方の仕事には複数のスタッフが必要。</li> <li>・PC 操作のための機材(モニターが複数など)が必要。</li> <li>・ブレイクアウトしたのち画面共有できるルームとできないルームがあり、設定変更の方法が分からなかった。</li> </ul>	PC 操作などのスタッフを確保する。モニターなど必要な機材を確保する。 分かる範囲で操作について事前に確認しておく。Zoom のバージョンアップでの機能を確認しておく。
メディアリテラシー・機器の扱い方	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・何回も回線が切れてしまう学生の対応で少し議論の進行が妨げられた。</li> <li>・突然回線が途切れて困った(教員)。</li> <li>・同じ部屋で複数人で参加しているところがあり、声が2重に聞こえたり、他の音が入ってきて進行しづらかった。</li> </ul>	インターネット環境を事前に確認し、整えておくことが必須である。教員も学生もできる限り個室で受講できるよう環境を整える。各自で機材や場所が準備ができない場合は、大学で場所や機材を確保し貸与する。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・画面の名前表示が変更していない学生がいた。</li> <li>・使い慣れていない学生が操作に手間取っていた。</li> </ul>	名前の変更、操作の仕方など、各校で事前にアナウンスし可能であれば練習しておく。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の授業内容では、スマートフォンやタブレットでの参加は難しかった。</li> </ul>	スマートフォンやタブレットではなく、PC で授業を受けることを推奨する。

また分類されなかった他の感想として「大きなトラブルなく無事に終わってよかった」、「1 日中パソコンと内容に集中し、学生さんたちの日頃の苦労を知る事ができた」、「今回の試みを活かせば、さらに WEB を活用し広範囲の学生と授業や研修を行えるのではないかと期待する」、「足りない知識が患者にどう影響するか感じられるよう、内容について考えていきたい」、「授業の流れを理解し、ファシリテーターとしての介入方法を確認しておかなければいけなかった」、「遠隔授業だという認識をきちんと持っていなければいけなかった」などが挙げられていた。

遠隔授業では同時に複数名が話したり周りの雰囲気を見て発言したりすることが難しいので、どうしても順番に話したり、話す人がいないと指名するという形式になりがちであることが分かった。また、多くの教員や学生が参加するため曖昧さがあると授業の効果が得られにくいので、「授業の目標や目的を明確にしておくこと」「ワークで行うことやスケジュールを明確にしておくこと」が重要で、それを全体に伝えておくことが必要だということも分かった。

今回の経験をもとに次の開催に向けて、授業内容や進め方、時間配分などを詳細に検討しなければならない。これまでと同じ授業を遠隔授業で実施するのか、新しく遠隔授業として組み立て直すのか決める必要がある。例えば「グループ(ブレイクアウト)になると隣の様子が全く分からないので進め方は事前に統一したものを決めておくか、ファシリテーターに裁量を持たせるか」や、「遠隔授業の利点を用いて学生に事前学習もしくは事前準備を求めるのか、もしくは当日参加でも可能な授業設計にするのか」など、対面授業とは違った点で検討する必要があることが分かった。これらのことを今後の授業設計に生かしたい。



## 5. さいごに

今年度は、この多職種連携の授業のみならず、多くの授業で Web 会議システムや LMS（授業管理システム）を用いた遠隔授業の実践となった。他の施設でも、多職種連携における遠隔授業の実践がみられる<sup>7)</sup>。学生も教員もこのような遠隔授業の経験は多くなく、手探りで状態での実施であったことは否めない。

しかしどのような形式でも授業は実施できるので、今後は COVID-19 の感染防止という観点のみの遠隔授業ではなく、どのような状況であろうが開催でき、より効果的な授業の実施方法を多施設協働で検討していきたい。

また、授業に参加いただいた医療系学生の皆さま、ご協力いただいた多施設の教員の皆さまに感謝申し上げます。

## 引用文献

1) 公益財団法人長寿科学振興財団

<https://www.tyojyu.or.jp/net/kenkou-tyoju/tyojyu-shakai/nihon.html>

2) 平成 28 年厚生労働白書

第 1 部人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える 第 4 章人口高齢化の乗り越える視点 第 3 節 地域で安心して自分らしく老いることのできる社会づくり

3) 厚生労働省 地域包括ケアシステム

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/)

4) 川上ちひろ、他 (2015). 施設を越える、職種を超える：多施設合同学生向け多職種連携教育課外セミナーに取り組んだ 3 年間. 医学教育, 46 (2), 178-184.

5) 川上ちひろ、今福輪太郎、恒川幸司、早川佳穂、西城卓也 (2018). 【実践報告】医学生が多職種医療系学生と協働して、「地域の人々の健康や生活を支えること」を学ぶ 医学部医学 4 年生の在宅医療を学ぶ多職種連携医療教育の実践報告. 岐阜大学教育推進・学生支援機構年報, 4, 129-140.

6) 川上ちひろ (2018). Part3-2、導入事例：多教育機関を巻き込んだ IPE、岐阜大学医学部医学科における多職種医療連携教育の実践、地域医療を見据えた多職種連携教育 (IPE). 看護展望 (7 月増刊), 16-22.

7) 沼沢益行、他 (2019). Zoom、LMS、Google スライドに併用により、例年の実地でのプログラムをスケールダウンすることなく遠隔で実施できた多職種連携実習の報告. 第 15 回医療系 e ラーニング全国交流会.

(Web サイト閲覧 2021 年 1 月 15 日)